

イタリア地方都市の地域社会と地縁組織(2)

—シエナ市民のアイデンティティ—

文 屋 俊 子

要旨 イタリア中北部、フィレンツェの南60km に位置する丘上城塞都市シエナは、中世から続く競馬の祭典パリオで世界に知られている。1995年に世界遺産に登録された歴史地区は、市壁に囲まれた丘の上の旧市街で、いままシエナ県の中心市街の機能を果たしながら、中世そのままの姿を保持している。この街を魅力的にしているのは、旧市街を17に分割する地区（コントラーダ＝町内）ごとに集まる市民が、年2回のパリオに優勝することを熱望し、歓喜に咽ぶ祭典を何世紀にもわたって続けてきた、いわば「中世が生きている街」に出会えるからである。

日本の地域と引き比べてみると、一般に私たち日本人はヨーロッパの小都市や地域での愛郷心や参加意識の強さに圧倒される。しかし、シエナでも他の地域でも、市民たちは理念としての市民意識よりも、虚栄心や対抗意識に語りかける世俗的な仕掛けのもとに地域社会感情を再生産しているといえるのではないだろうか。

今夏、短期滞在したシエナで、2001年から参与観察を試みている地区が思いがけず優勝した。地区と住民のパリオ前後を追いながら、資料収集の成果の一端を示し、地域参加の原動力を探り、地域アイデンティティの問題を考えたい。

キーワード 地域社会、地縁組織、コントラーダ、参加、町内会

パリオ競馬は毎年7月と8月に開催される。街の中心のカンポ広場を10頭の馬が三周し、パリオと呼ばれる縦長の幡を優勝した町内が獲得する。その幡は競馬に先立つ時代行列でシエナ自治政府の役人に守られ、4頭の白牛が引くカロッチャと呼ばれる車にうやうやしく乗せられてきたものだ。はじめてパリオをみたものは、その中世の時代行列と旗振り演技のほうが見ものだと思うかもしれない。そして、優勝コントラーダの熱狂に驚くだろう。

スタートすれば90秒で決着がつくこの競馬には賭け事はなく、賞金もない。しかも一着だけが優勝で、それ以外はすべて負けである。16世紀以来、各町内のパリオ優勝回数は数えられている。この記録を更新するために、町内は一年を通じて準備に巨費を投じ、優勝祝いの行事には膨大な出費を惜しまない。パリオ開催の全体は市の後援のもとに行われるが、出走や町内の行事にかかわる費用のすべては、コントラーダに属する市民の負担である。シエナ市民はなぜ

パリオに熱中するのか。

パリオの準備や行事には、スリリングな工夫がこらされている。コントラダは17あるのに、出走できるのは10町内である。前回出られなかった7町内が出走するのは確定しているが、残りの三つの町内はパリオの数日前に抽選で決まる。だから、すべての町内がこの日まで一年中臨戦態勢なのだ。また、出走する馬は町内で決められるわけではない。駄馬や扱いの難しい馬などもわざと混ぜて能力に差がでるように選んだ10頭を、レースの三日前に抽選で各町内に割当てる。すべてが運試しなのだ。

このような仕掛けは、何世紀ものあいだに練り上げられてきた。町内の人々は抽選のたびごとに一喜一憂し、つぎにどうすれば良いか、戦略を練る。だからシエナ市民の間ではパリオは一年中続いている。かれらはコントラダ（町内）に帰属し、パリオに熱中することで、コントラダ人そしてシエナ人としてのアイデンティティを生きているとあってよいだろう。

地域社会におけるアイデンティティが弱体化し、地域の自治能力を衰退させてきた日本の地域と引き比べてみると、一般に私たち日本人はヨーロッパの小都市や地域における住民の愛郷心や参加意識の強さに圧倒される。歴史的な市民意識のちがいにその淵源を求める論調が日本の学界では強く、その方面での研究がさまざまな分野で多く見られる。しかし、シエナでも他の地域でも、市民の参加意識は世界でも古い市民自治の歴史を持っていることにのみ依拠して維持されているわけではない。むしろ市民たちの虚栄心や対抗意識に語りかける卑近で世俗的な仕掛けが地域社会感情を再生産しているといえるのではないだろうか。

以下に、シエナのパリオをめぐるコントラ

ダへの市民の参加意識の原動力をさぐり、地域のアイデンティティの問題を考えたい。

1. コントラダの費用と市民の負担

2005年8月、短期滞在したホームステイ先の家族とパリオの馬の抽選を見に行った。くるくる回る抽選箱から取り出された札の番号を読み、周囲に示すのはシエナ市長である。周りにはパリオ協会の事務局長はじめ市のお歴々が並び、抽選を監視・記録している。パリオ開催に関するすべての手続きは、市の重要行事なのだ。みな間違いがないよう真剣に取り組んでいる。

馬と町内の組み合わせが決まるごとに、13世紀以来の市庁舎の壁に馬の番号と引き当てたコントラダ名が掲示され、馬がすぐに引き渡される。いい馬が当たった地区が意気揚揚と歌を歌いながら馬とともに引き上げていく。抽選と並行して馬の引渡しが行われるため、歓声とどよめきで抽選結果を告げる市長の声が聞こえない。

そのとき、友人が地面から30センチは飛び上がった。所属しているコントラダの馬番の動きで、最高の馬が当たったことを察知したのだ。興奮しながらも慎重に掲示を見つめる。間違いない。一緒に来た従姉妹と抱き合って跳ねている。眼には涙を浮かべ、「ああ、神様！何てことでしょう、初めて、長い間待って、初めて…」。

その姿を見て、周りを見回して、同じコントラダの人が最高の馬が当たったことに気づき、興奮している。みんな町内の色の紋章がついたスカーフをしているので、知りあいでもなくても自分のコントラダだと分かる。すぐに駆け寄って喜び合う。

「まだ、馬だけよ」冷静な声が飛ぶ。いや、冷静になろうと努力しているのだ。「馬だけだけれ

ど、馬が全てなんだもの」、「まだ勝ったわけじゃない」。友人が私の手を掴み、コントラーダに引き渡される馬のほうに急ぐ。中世の短甲を着けた馬番(その役を演じて最前列に居並んでいた)が興奮のあまり近くの柵や何かを鞭で叩き、ぐるぐる走っている。周りが心配して鞭を取り上げ、羽交い絞めして落ち着かせている。互いに抱き合ったりして喜ぶみなの中には涙が湛えられている。馬も周囲のただならぬ雰囲気と興奮気味だったが、プリオーレ(コントラーダの長)を先頭に地区の歌を歌い行列がはじまると、馬はその前をおとなしく歩きはじめた。プリオーレはじめコントラーダの主だったメンバーには、すでに決意の表情が読み取れる。なんとしても勝つのだ。この地区が最後に勝ったのは1961年のことだ。ここ数年はパリオの最長連敗記録を更新しつづけている。

すでに定評ある騎手の名が囁かれている。騎手はパリオごとに雇われて乗る。最高の騎手は一回1500万円以上の契約金を受けとり、優勝すればさらに上乗せがあるという。実際の金額は分からない。コントラーダ同士には、騎手の買収を含めたさまざまな取引があり、戦略上、財政は秘密にされている¹⁾。ただ、定評のある騎手はいい馬にしか乗らない。いい馬を引き当てないことには優勝を狙うこともできない。買収や取引は戦略の一部であって、いがみ合いの理由にはなっても禁じられてはいない。外国人のわれわれには驚きであるが、大きな金額がパリオのために動く。資金をどう集め、プールし、どう遣うか、役員層はここでの手腕が試されるのだ²⁾。

パリオを優勝に導いた役員たちは現実のビジネスの世界でも一目置かれるようだ。弁護士、銀行家、会社経営者など現役の職業人が地区の

役員を兼務している。夏の暑い期間、イタリアをはじめヨーロッパはバカンス・モードになっている。午後は休みのオフィスも多い。現実のビジネスが停滞しがちな期間、パリオのために時間を割くのは「たいへん！」であっても、名誉であり不可能ではないのだろう。

馬の抽選後、数度、リハーサル競馬がある。本番の前日は、行列などを含めた総合リハーサルで、その夜には資金集めの大きな野外ディナーが全てのコントラーダで催される。1人40ユーロ(約5500円)、筆者の参加した地区は1,500人が通りに並んだテーブルに付いた。そこに封筒が配られる。「優勝した場合、この金額を寄付します」という誓約書である。そこに金額と連絡先を書き込む。200ユーロと書き込みながら、今年から年金生活となった友人が「優勝したら、よ！」と嬉しそうに封をする。このディナーには数度出席したが、寄付のお願い状が配られるのを見たのはこれが初めてだった。役員の決意が伝わってくる。今回の勝利のために、金に糸目はつけない覚悟なのだ。

コントラーダには土地や建物があって不動産収入がある場合も少なくない。食事会などの活動と合わせ、どのコントラーダにもパリオのために相当の資金が蓄えてあるはずなのだ。ましてや44年間勝利から見放された地区には、いざというときのための備えがたっぷりあってあるはずである。それをすべて放出する覚悟らしい。

息子も含め、この家族だけで300ユーロを約束した。母と息子だけのそれほど豊かとはいえない家族なのだが、優勝したらその後のお祝い会費や出版物の購入を含め、今年のコントラーダへの出費は大変なものになるだろう。この母子は、年間40ユーロの後援者会費をそれぞれ支払っている。そしてコントラーダの夕食会にた

びたび顔を出し、その度に10〜20ユーロを出している。

パリオの日、息子はバルコニーからの観戦席のチケットを持って帰ってきた。観光客が多くなるにしたがい高騰したチケットは今では立ち見で230ユーロ以上する。勝利の可能性が高くなって、テレビ観戦では我慢できずに探して手に入れたのだ。90秒のレースのために、である。パリオの勝利は、この高額な負担に見合うものなのか。

2. なぜパリオは続けてこられたのか

シエナの発展は、フランス、北ヨーロッパとローマ教皇庁との間を結ぶ比較的安全な尾根伝いの街道が発達した中世初期に、街道の分岐点にあたるシエナの丘に城壁が築かれて街が形成されていったことに始まる。11-12世紀には、商業的な拠点形成され、民家が増えて市壁を拡張し、自治都市として発展した。13世紀には教皇庁の金庫番としてシエナ商人が活躍し、14世紀には人口5万人を超える中世ヨーロッパとしては有数の都市となった。

当時のシエナ商人は、北ヨーロッパとの間に金融資本のネットワークを張り巡らした国際商人であり、彼らを中心に富裕な市民層は13世紀初頭には貴族や諸侯に対抗する勢力 *popolo* を結集し、政治の場に出ていった。13世紀後半には市民層中心の自治政府を実現し、合議にもとづく行政運営がされていた。今に残る市庁舎やカンポ広場、大聖堂の建設をはじめ、水利、市街の整備、市壁の度重なる拡張、大学の設置など、シエナの主な都市建設は、この自治政府時代に行われたものである³⁾。

一方で、周辺の田園地帯をめぐる領邦都市国家同士の争いは激しく、北に位置するフィレン

ツェとの戦いは、何世紀にもわたって繰り返された。そのなかで、とくに1260年のモンタペルティの戦いはダンテの『神曲』⁴⁾にも書かれているものだが、シエナはフィレンツェに大勝して敵の旗印を乗せたカロッチャ（戦車）を奪い取るという快挙をなしとげた。しかし、それ以降、シエナは軍事的にフィレンツェに圧されることが多く、16世紀半ばにフィレンツェ・メジチ家の軍門にくだった。

メジチ家が衰えるとシエナはトスカナ大公国の一地方として何世紀もの不遇な時代を過ごすことになる。ハプスブルグ家の相続問題からんで、大公国の為政者はフランス、スペイン、ババリアなどに変わる。そのたびにシエナには外国の軍隊が駐屯し、首都であるフィレンツェにも冷遇されて、経済は停滞し、人口も減った。この暗黒の時代に、敵の旗印を奪った戦いの記憶は、シエナ自治政府時代の栄光の記憶として、また再起を期す心の支えであっただろう。

現在、パリオの行列の幡を載せたカロッチャは、フィレンツェから奪った旗印を髣髴とさせる。カロッチャに載せるという演出は後世のものだが、パリオとは、そもそも絹織物の幡のことであるし、パリオ競技は、16世紀以来、誰の目にも旗印を奪い取るための競技である。実際、地区の馬が一着に入った途端、コントラダの人々はコースに飛び出してきて、広場の隅のパリオ優勝旗が掲げられているところによじ登る。建物の3階程度の高さに掲げられていたパリオは、よじ登った人々によって下ろされる。優勝旗の授与式なんてものはない。レース前にあれほど恭しく掲揚された幡が、文字通り奪い取られる。それが何を意味するか、シエナ人の眼には明らかである。フィレンツェの支配下で、シエナ市民軍は解体した。これ以降、市民軍の勢

ぞろいの中でもあったカンポ広場⁵⁾で、裸馬の競馬パリオの開催がたびたび要請され、市民が熱狂したのも頷けるというものだ。

3. コントラーダの起源

旧市街は、現在でも地勢によって三つのテルツォ *terzo* (三分区) に分けられている。各テルツォは、もともと政治的・軍事的地域区分であって、戦時にはそれぞれ大隊を編成した。さらにその内部はポポロ *popolo* と呼ばれる地区単位に分かれていた。ポポロは、小教区とも重なり合い、平時にはリーラ *lira* という徴税単位としても機能していた (Bowsky)。

地区単位としてのポポロの数は、人口によって増減している。1348年のペスト大流行の直前には、シエナ全体で60を数えていたポポロは、人口の半数が失われたといわれるこのペスト後には42に整理されている⁶⁾。その後、シエナは他国に支配されて長い停滞の時代を迎え、経済不振による過疎化が進行した。近代の産業化にも遅れをとったこの地域が以前の5万人の人口を取り戻したのは、20世紀に入ってからのことだった。

現在のシエナには、それぞれのテルツォを5つか6つに分けるコントラーダ *contrada* と呼ばれる17の地区がある。この区域は、1729年に、当時のシエナ領主であったババリア公妃が、そのときにあったコントラーダの境界を定め、これ以上の分割や統合、新設を禁じたのに由来している。日本でいえば「町内」にあたる地区単位だが、この起源はもともとはポポロで、16世紀ころからコントラーダという名称で記録に残ることになったものであるといわれている (Checcini)。ポポロという言葉は人々、つまり特権階級ではない一般市民のことでもある。自

治政府時代にポポロが政治的・軍事的地区区分の最小単位であったのに対し、コントラーダは専らパリオ開催の地区としてのみ記録されている。生活扶助組織も同じ地区単位に組織されていたようであるが、他国支配にともなう地区に以前の政治的・軍事的役割が失われるとともに、地区の名称も変わってしまったということなだろう。

外国人の為政者による1729年のコントラーダの境界に関するこの布告は、面白いことにシエナ市民に守り続けられて今日に至っている。地区範囲を変えようとする動きがあるたびに、伝統を守ることが優先された。それまで地区間では所属地争いや分派の動きが激しく、争いの種だった。一度変更を許せば収拾がつかなくなると考えられたからだろう。

4. コントラーダへの帰属意識と敵対関係

コントラーダは、そこで生まれたものがそのコントラーダに所属するきまりだった。現在のアメリカ国籍などと同じ出生地主義である。人口減少時代には、コントラーダの勢力は人口に依拠する部分も大きかっただろう。たとえば、臨月の妊婦の誘拐監禁事件があったという。よそのコントラーダの子どもを自分のコントラーダ成員にしようとする悪巧みである。もっともこの事件には、人口問題よりも敵コントラーダに対する嫌がらせの意味合いが強い。

1729年以前には、コントラーダの分割・統合が絶えず、これにともなう紛争が激しかった。地区住民がつかう水場や大きな教会などの帰属をめぐる、さまざまな争いがあったようだ。そのほかにもコントラーダ境界の微妙な部分をめぐって、隣のコントラーダとのいがみ合いは多かったようで、敵対関係が生まれていた。現

在、どのコントラダにも敵コントラダ、味方コントラダがある。パリオでは敵の優勝を阻むためにはなんでもするし、そのためには味方に協力してもらう必要がある。この敵対関係はいまではすっかり制度化され、観光パンフレットにも明記してある。

子どもたちは、生まれたときからコントラダの集まりに、地区の色の紋章の入ったスカーフを着けて参加する。そこで歌われている歌の歌詞は、しばしば敵コントラダをこき下ろす内容のものだ。クレヨンを持つようになると、地区の色の組み合わせを美しいといい、敵の色を良くない色だと教え込む。衣服の色も地区の色を着ていると似合うと褒める。学校で遊ぶときも、かけっこはパリオのまねごとだったり、友人同士で敵・味方を区別したりする。ふつう、子どもたち同士でそんな争いをしてはいけなくて教えるのが大人の役割だろうが、ここでは敵をこき下ろす歌を歌う子どもをいい子だと褒める。それでも敵コントラダの子と友だちになったり、結婚したりしている人も多いのだから、めくじら立てることもないのかもしれない。

パリオの優勝コントラダは、勝利が決まるとすぐに大聖堂にお礼のお祈りを捧げに行く。その後はパリオの幡を掲げ太鼓を打ち鳴らして街中を練り歩く。敵の地区の近くに来ると、とくに声高に歌を歌ってこきおろす。これがえんえんと何日にもわたって繰り返される。何日か後の土曜日から日曜日には、仮装行列を大々的におこない、そこでは敵コントラダのシンボルになっている動物に仮装した人が檻に入れられて鞭打たれたりといった、少々行き過ぎの笑劇が山車の上で演じられたりもする。

敵が優勝しようものなら、いい大人が悔しい

とっておいおい泣いている。さっさと家に帰って窓をぴたりと閉じ、外の騒ぎを聞かないようにしている。地区で評判のレストランでさえ臨時休業にして、旅行に出かけてしまうありさまである。

5. パリオ勝利の意味するもの

2005年8月のパリオに、筆者のホームステイ先の地区は、ついに優勝した。44年ぶりの優勝だったので、喜びは頂点に達した。優勝の瞬間、あまりの興奮のために人目もはばからず声をあげて泣き出したり、喜びを表す方法が見つからないというふうに、小躍りしながら駆け回る者が続出した。ふだん冷静で知られているような人物までが身体中で喜びを表現しながら、眼に涙をうかべて誰彼かまわず抱き合って喜んだ。

しかし、それはまだ序の口だった。大聖堂に駆け込んだの祈りのあと街を練り歩き、地区に帰ってひとしきりお祝いの乾杯や鐘付きを夜半過ぎまで続け、さらに明け方まで太鼓を叩きながら街中を練り歩く。翌日は朝から扮装をして各コントラダを回るのが、ついて行きたい人は誰でもぞろぞろこれにしたがって、食事も満足に取らないまま夜半まで練り歩く。そして、そのまま食事会になだれ込む。

ふだん足が痛いといって不平をいっている者が走り回っているし、身体障害で歩くのがやっとという女性も、80歳を過ぎたお年寄りも杖をつきながらついて行く。赤ん坊をベビーカーに乗せた一団、元気な男ばかりの野太い声で歌う一団、中等学校の女生徒ばかりの一団、親戚や友人グループでまとまっている一団など、大まかな順序は決められ、世話役が交通整理したりしているけれども、参加者はどうみても適当に好きなところにもぐり込んで歩き、歩き疲れた

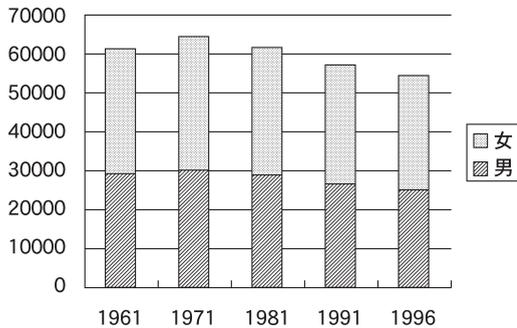
ら列から外れるという具合だ。これが連日、朝から夜半まで繰り返される。

行列は参加してみると華々しいところはあまりない。むしろ興奮は内在化され、勝利の味を個々人が噛みしめながら、ひたすら歌い、歩くだけである。それは長年にわたる屈辱の思いを、この一瞬一瞬に一歩ずつ洗い清めているかのようにも見える。

パリオがなければ、シエナには何も残らなかったという思いがある。シエナの長い暗黒の歴史とコントラーダの優勝にかかわる個人の思いが、ここで交差しているのが見える。コントラーダに優勝がないということは、シエナが他

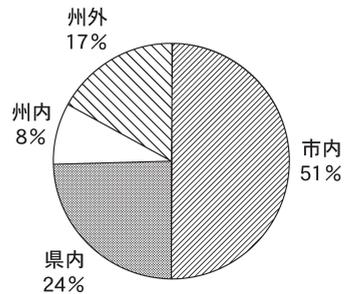
国支配に勝てなかったことに重なる。敵が勝つということは、敵に馬鹿にされつづける屈辱にひたすら耐えることである。耐えに耐えた結果として、勝利はとてつもない喜びに変わる。このパリオを続けながらシエナは何世紀にもわたる暗黒の時代の屈辱を乗り切った。勝利の行列が傍目に楽しいとか楽しくないとか、歩くのさえやっとの老人が杖をついて行列しているのがどうだとかいう問題ではない。シエナ人がシエナ人であることを確認する場なのであり、シエナ人にとってのみ、パリオの勝利はとてつもない価値をもっている。

シエナ市の人口推移



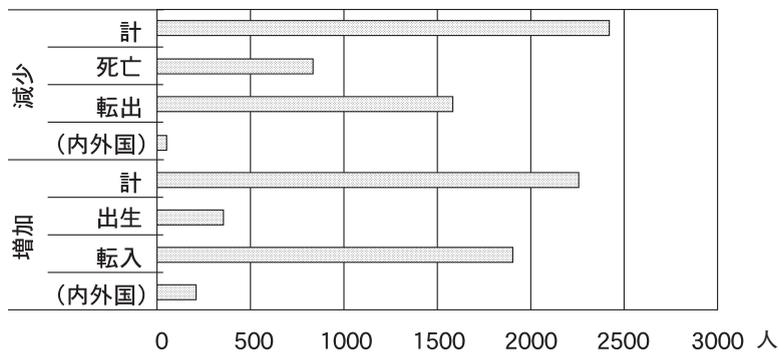
資料 1

シエナ市民の出生地 (1996年)



資料 2

人口動態 (1996年)



資料 3

6. シエナ人とはなにか—パリオ傾倒への問い

「パリオがなければ、コントラーダもないし、コントラーダがなければパリオもない」とシエナっ子は歌うように言うが、さらにいえば、パリオがなければシエナ人もなかったということなのではないか。実際に行列に参加しているシエナ人も、母親か父親のいずれか一方が他地域から転入した人である場合が多いようだ⁷⁾。一緒に歩いていた友人も、父親はナポリ出身、息子の父親はミラノ出身である。友人は外国に行って事業を始めるという夫と離婚してシエナに残った。それだけが離婚の理由ではないのかもしれないが、そう聞こえるほどシエナを離れることは彼女にとって大きな問題だったのだ。シエナ人に会うたびに出自を聞いてみたが、彼らのほとんどはシエナ以外の出自の親や祖父母をもっている。シエナ人はシエナ人として生まれたというより、パリオによってシエナ人になった人たちともいえる。

だからなのだろうか、「イタリア人でも、よそ者にはシエナのことは分からない」と親しくなったシエナ人は必ず言う。東洋人の筆者がパリオとコントラーダの人々の気持ちが少しは分かっていると認めてくれたときの誉め言葉である。そうすると、もう、家族の一員に準じた扱いをし、食事会などで近くに座った周囲の人に、明らかに異質な筆者について、こういう人だと説明してくれたりする。勝利の行列でもそうだが、コントラーダの行事にコントラーダ以外の人が混じるのはあまり気持ちのいいものではない。そこは自分のアイデンティティを確認し合う場でもあって、ただのパーティーではないのだ。友人のおかげで、コントラーダの行事に筆者がもぐりこんでいるのに文句をいう人はあまりいなくなったようだ。行列の写真を撮るため

に進路を少しふさいでいても、以前のように交通整理係に制止されることもなくなった。

パリオで優勝すると、ここ10数年来、コントラーダの紋章つきスカーフにおしゃぶりをつけ、口にくわえて歩くのが一般的になっている。お爺さんやいい大人が街なかでおしゃぶりをくわえているのだから、観光客などは不審に思う。これは、このコントラーダで生まれたという意味を形で示したものだ。実は、おしゃぶりをくわえるのは恥ずかしい。恥ずかしいけれども、いや、恥ずかしいからこそ、価値があるのだ。

友人はおしゃぶりを買って、早速、行列に出かけた。帰ってくると、息せき切って「どうしておしゃぶりをくわえているのかって訊かれたのよ、私が訊かれたの」と嬉しそうにいった。もちろん、勝利しなければくわえることもなかったし、訊かれることもない。その気持ちは十分に理解できる。「そのおしゃぶりは、何の味？」ときどき尋ねることにした。そのたびにニッコリして「勝利の味！」と友人は答える。

優勝から2日目、ホームステイ先の友人の妹がやってくるという。700キロ離れた南部の小都市から、一人で車を運転してやってくるのだという。「まあ、一人で、自分で運転して来るなんて！」と家族は知らせを聞いて驚いていた。そんなことはしたことがない人だというのだ。それも、この間まで、電話のたびに泣いていた。まだ50代で医者をしていたご主人が今年のクリスマス前に亡くなった。彼女はその痛みから立ち直れずに、毎日泣き暮していると聞いていた。コントラーダの優勝をニュースで知って、彼女はまる一日ハンドルを握ってやってきた。優勝を味合うために、行列で歌を歌うために来たのだ。母親や姉に囲まれ、彼女は微笑んでいた。母親と姉が、それを何より喜んでいたのは言う

までもない。

家族を亡くし悲しみに沈んでいた人が、パリオの優勝に生きる力を与えられたという話はあちこちにある。「神様が悲しみの埋め合わせをしてくれたのよ。でも、私がいちばん泣けたのは、優勝の報告にコントラーダの墓地に行ったときよ。まだ新しいお墓を見ると、この優勝を見せてあげたかったと思って…」

よそ者はシエナ人のパリオへの傾倒を「狂っているとしか思えない」という。シエナ人もそれを認める。シエナに住むよそ者から、筆者もそういう言葉を何度か聞いた。シエナ人自身にこれを聞くと、「私だってパリオじゃ^{パッツァ}*pazza* (狂っている)よ」という。パリオ狂いと呼ばれるのは、少し名誉に感じるくらいであるようだ。パリオに参加することは、自分のルーツを確認することである。自己のアイデンティティをかけた価値合理的行為である。コントラーダとパリオは、喜びも悲しみも屈辱も人生のすべてを与える。パリオで感情を思い切り開放し、シエナ人は困難な時代を耐えてきた。どのような思いもパリオが押し流してくれる。コントラーダとパリオが必要とされつづけた理由がそこにあった。まさにコントラーダにいることは価値であり、どのように不合理にみえても、彼らにとっては価値合理的行為なのだ。

7. コントラーダ参加の問題点—商業化と参加者の変化

コントラーダの子どもたちは、パリオの行列に高価な時代衣装をまとうて参加することを夢見ている。太鼓や旗振り演技が上手だと、パリオの行列で妙技を披露する機会を与えられ、それが一生の自慢なのだ。シエナっ子にパリオに出たことがあるかと問えば、僕は旗手だったと

か、鼓手だったとか、満面の笑みで応えてくれる。その他にも旗持ちやさまじまの役があって、男の子を持つ親たちは、行列のいい役が廻ってくるのを期待して、とくに熱心にコントラーダの活動に参加する。

仕事をもとめて市外に出た人も、以前は妻が妊娠したらコントラーダで出産するために里帰りするのが常だった。自分の子どもがコントラーダっ子でなくなるとは寂しい。

第二次世界大戦後、社会移動が激しくなるにしたがい、地区外で生まれた子どもも一定の手続きでコントラーダに登録されることになった。戦時中に破壊された旧市街から、市壁の外の開発住宅地域に人口が移動し、コントラーダの拡張や新設の必要が叫ばれた。結論としては、地区範囲はこれまでどおり旧市街にかぎる代わりに、コントラーダの新しい登録制度と会費制度が作られた。同時にコントラーダの登録時に洗礼することが一地区ではじめられると、瞬く間に全体に広がった。一方、居住地の縛りはずしたため、コントラーダの登録者の合計は、シエナ市の人口を超えてしまったという話もきく。外国人さえ洗礼を受けて会費を払えば、コントラーダに登録できるようになったからだ。

現在、旧市街に住む人口は、シエナ市5万の人口のうち、1万7千にすぎない。コントラーダは歴史的地区に限られているため、これに代わる法律上の地区制度も必要となって、現在、市全体を5地区に分けた地区組織がつくられて交通やごみ分別収集などの議題を扱っている。これに関しては、ポローニャなどの事例が日本でも紹介されている(中田実他、三上禮次)が、シエナでの市民の評判はいまひとつである。とくに、中心市街の地区割が市壁内の旧市街と一致せず、人口にして4千人もずれてコントラー

ダが分断されているのが市民には不満である。

郊外地区には登録人口が極端に少ない地域がいくつもある。別荘で市民登録のない一時滞在人口がかなりの数に上る。また、シエナ人は市壁内と市壁外の両方に家を持っている人も多い。この場合、どちらに住民登録しているかという問題もある。

80年代に地元テレビ局ができ、ユーロビジョンの中継が始まって全ヨーロッパに放映されるようになると、パリオは次第に有名になって年々華やかになった。

しかし、シエナ人以外の見物客が増えたため、生粋のシエナ人も観覧席の確保が難しく、今ではテレビ観戦するのが普通になっている。コントラーダの登録者や催しの参加者に、よそ者が交じるようになって、雰囲気が悪くなったというものもある。

現在、コントラーダの年会費は40ユーロ、資金集めのディナーは一回当たり10～40ユーロというところだ。これに加えて、それぞれの役割や役職の仕事があるので、熱心な参加者の手間と出費はかなりのものになる。パリオ全体の運営は市と実行委員会の予算やモンテ・デイ・パスキ銀行をはじめとする多額の寄付・貢献があるが、コントラーダ自体の運営は基本的に個人会費でまかなわれている。

現在、パリオについては、騎手の報酬が高騰し、商業主義が行き過ぎているという不満もでている。また、コントラーダっ子のなかにも活動から疎遠になり、会費を払わないものもある。若年層の失業率が高く、若者とはいえない年齢になっても収入がともなわないと、コントラーダへの参加は難しくなる。もちろん、コントラーダの調理など大変な仕事をするとか費なしに参加できる仕組みはある。高学歴ほど失業問題が

深刻なイタリアでは、学卒のプライドが邪魔して、距離をおくものも多いようだ。ただ、戻りたければ、いつでも戻れる。この点、コントラーダは実におおらかで、参加するもしないも自由、いつ止めても再開してもかまわない。参加しつづけられるのは、それだけでも幸運といえるのかもしれない。

コントラーダには、プリオレ(会長)、キャプテン(パリオのキャプテン)に財政部門の責任者であるソチエタの長の三人が率いる役員組織がある。役員は、この3役とその補佐の7～8人程度が、コントラーダの16歳以上のメンバーによる選挙で決定される。ある地区での選挙方法は、まず、役員選任委員を選挙で決め、その役員選任委員会が役員候補者名簿をつくり、これを全メンバーの信任投票にかける、という手順を踏む。役員組織をゴヴェルノというが、「政府」と同じ単語である。

コントラーダに参加する場合の役割は多種多様である。どんな役をしたいと申し出るのは歓迎されている。若者は配膳の手伝いなどをするかわりに、ただで会食に参加できる。その他、衣装の繕い、集会所の掃除、行列のときの交通整理、街路の旗立てなど、枚挙にいとまない。傍目にはうまくいっているように見えるコントラーダの運営も、中堅役員に聞いたところでは、「最近は責任感がないものが増えた」とこぼしていた⁸⁾。

8. 観光資源としてのコントラーダ

パリオの全体行事は、シエナ市を中心に県、警察、消防、各コントラーダなどが協力して委員会をつくり、運営している。パリオの書籍や公式映像などの権利関係を扱うパリオ権利保護協会もあって、パリオ関係の著作物にはこの

マークが入っている。

パリオ競技は年に2日だけの行事だが、夏をばさんで、春から秋にかけて、17のコントラダの祝日や、優勝コントラダのお祝いが延々と続くので、冬以外のどの時期にもシエナには太鼓の音や旗振りなどパリオの雰囲気が漂っている。コントラダは、自分たちのために費用を分担して活動しているのだから、観光関連産業にとってはコストのかからない観光資源ともいえる。

モンテ・デイ・パスキ銀行はパリオ最大のスポンサーで、20年に一度の衣装の新調費用を負担している。絹製で立派な衣装は高価で、数も多いため、市民に感謝されている。しかし、銀行としては、パリオの振興によって観光開発投資の成功をえられるメリットがある。コントラダ役員には銀行の上級職員も多く、パリオにかかわることは本業の利益になる場合もあるだろう。

シエナの地域経済の成功は、周辺の農産品、とくに有名なトスカーナ・ワインの高品質化と美しい田園風景に負っている。これに世界遺産となった街とパリオが観光に結びついて地域全体を世界ブランドに押し上げてきた。シエナ周辺の小さな町でも、何世紀も廃絶していたコントラダを復活させ、シエナにならったお祭りの行事を復活させ観光客を引き込もうとする開発が、モンテ・デイ・パスキの支援で着々と進められている。

9. 結語—地域のアイデンティティ

第二次世界大戦の直後の食糧難の時代、パリオの馬の抽選に集まったのは一握りの人々だった。あるコントラダでは当たった馬を引取るはずの馬番がおらず、仕方なくそこにいたおば

あさんが一人で連れ帰ったという。今日の隆盛をみれば信じられないことであるが、シエナもパリオも栄枯盛衰を重ねてきたのである。

日本の地域社会の多くが弱体化する中で、地域住民との協働による地域運営に期待される風潮が地方分権という言葉とともに強まってきた。これが単にシステムの問題にとどまるならば、地域社会は実質をもたず、過去に行われた地域振興策のようにどの地域に行っても似たような施策がとられ、同じようにたいした成功をみないままに終わることが危惧される。

もともとの日本の地域社会は、自分たちが必要だと認めたことについて、自らの工夫で行う自立的な社会であった。その自立性は地域への帰属意識に裏打ちされていたことは、いまも各地に残る特徴的な祭りや行事のなかに見て取ることができる。シエナほど激しくないにしても、地区の競争に自慢や意地の張り合いが見て取れる。遠く離れたシエナと日本の地域社会で、実は同じような地域社会システムがあるということは注目される。

農産品をはじめ、およそ生産物の品質向上も、どこにも負けない品ということに誇りをかけた競争が一級の品を生み出す原動力である。よそでやってないことをやるというのが、イノベーションのきっかけである。そういう意味でいえば、近年の日本の地方自治においては、結果的にその逆のことが行われ続けてきたように感じるのは間違いだろうか。地域社会に必要なことは、自慢や意地、対抗心、敵愾心というような、あまり穏当でない言葉で表されるものではないだろうかと思う。

これらを生み出すのは、自らのアイデンティティであると言い換えてもよい。いまの日本の地域社会に必要なことは、地域のアイデンティ

ティの回復であり、それがよその真似でない、地元の歴史や伝統に発した価値感であって、それが住民意識に内在化されることではないかと思う。その観点から見るとシエナがたどった道筋は、どの地域社会にも可能性があることを示唆しているのではないか。一方で、シエナ近郊の開発やパリオの商業化に一抹の不安を覚えるのは杞憂であろうか。

注

- 1) たとえば各コントラーダの登録者数を正確に把握することは困難である。コントラーダに年会費を支払ったものが登録者であって、この数は日々変動する。また、パリオの戦略上、財政規模や弱みを敵に知られるのを極端に恐れるコントラーダ役員はこの質問に答えたがらない。最小のコントラーダで500~700人、最大で3千人以上といわれている。
- 2) Weber, M., *Wirtschaft und Gesellschaft*, Kapitel IX. Soziologie der Herrschaft. 8. Die nichtlegitime Herrschaft (Typologie der Städte) S.748. (マックス・ウェーバー (世良晃志郎訳) 『経済と社会』 第二部第9章8節「都市の類型学」創文社、1965年、53頁。) において、都市の区は「(シエナでもなお競馬の費用をまかなっていたように) 競技の費用をまかなうという機能ももっていた」とこのことに触れている。
- 3) Douglas, *Storia Politica e Sociale della Repubblica di Siena*, Siena, Libreria Senese Editrice, 1926のほか、Dundes & Farassi 1975、石鍋1988、清水1982、Weber 参照。
- 4) ダンテ・アリギエーリ『神曲』(山川丙三郎訳、岩波文庫)による。
- 5) Weber, M., *ibid.*, S.743. (同上書36頁)に

において、ウェーバーもカンポ広場が「騎士の試合場、今日でもその都市区の競技場」であって、市場の開かれる広場は別にあることに触れている。

- 6) この記述については、Bowsky 1981及びMarzucchi 1998によった。ポポロとコントラーダの起源についての歴史研究は、Cecchini 1958, Pepi 1967などが早い。
- 7) 多くのシエナ人同様、両親の片方の出自はシエナ人ではない。実のところ、シエナの発展とともに外国から来住した外国の名前を持つシエナ人も少なくない。これとシエナの外国支配の長い歴史を考えれば、シエナ人のアイデンティティがつねに崩壊の危機にあったことは想像に難くない。
- 8) コントラーダ・ドラゴの青少年担当役員 Sig. Fabio Neri からの2003年8月の聞き取りによる。

文献

- Bowsky, W.M., 1981, *A Medieval Italian Commune, Siena under the Nine 1287-1355*, California.
- Cecchini, G., 1958, *Palio e Contrade, nella loro evoluzione storica*, in *Palio*, Milano, Electa. Comune di Siena (Ufficio Statistica), 1996, *Bollettino di Statistica 1996*.
- Douglas, L., 1926, *Storia Politica e Sociale della Repubblica di Siena*, Siena, Libreria Senese Editrice.
- Dundes, A. and Falassi, A., 1975, *La Terra in Piazza*, California.
- ISTAT, 1993, *Popolazione e Abitazioni : Fascicolo Provinciale Siena, 13° Censimento Generale della Popolazione e delle Abita-*

- zioni, 20 ottobre 1991, Roma.
- 石鍋真澄, 1988, 『聖母の都市シエナ 中世イタリアの都市国家と美術』吉川弘文館.
- Marzucchi, 1998, *Le Contrade di Siena: Evoluzione Storica ed Attualità*, Siena, Betti.
- 三上禮次, 1991, 『都市計画と住民参加 —ポローニャの試み—』自治体研究社.
- 中田実編, 2000, 『世界の住民組織 アジアと欧米の国際比較』自治体研究社.
- Pepi, G., 1967, *Le Contrade e il Palio*, Siena, La Diana.
- 埼玉自治体研究所・イタリア CdQ 研究会, 1982, 『地区住民評議会 イタリアの分権・参加・自治体改革』自治体研究社.
- 清水廣一郎, 1982, 『中世イタリア商人の世界』平凡社.
- Waley, D., 1991, *Siena and the Sienese in the thirteenth century*, Cambridge.
- Weber, M., *Wirtschaft und Gesellschaft*, Kapital IX. Soziologie der Herrschaft. 8. Die nichtlegitime Herrschaft (Typologie der Städte). (マックス・ウェーバー (世良晃志郎訳) 1965, 『経済と社会』第二部第9章8節「都市の類型学」創文社.)